

アデュー・つくし野

桜木一郎

最近、居をつくし野から移した。つくし野には40年以上住んだことになるので、愛別のしるしにこの一文をこの街に捧げたい。

「森村の月」

深い森から上る月。満月の夕べ、つく小の裏から上る月を良く撮影に行った。月はこれからも同じことを繰り返してくれるのであろう。さようなら！



「紅葉のリズム」

毎年紅葉の時期になると、赤や黄に染まった落ち葉を道すがら拾うのが楽しみだった。落ちた直後が一番美しい。あるとき小さなお嬢さんが不思議がって“何しているの？”ときいてきた。欲しいの？と聞くと“うん”との返事。中央桜通りの坂の途中で翌日待ち合わせ、その日集めた桜落ち葉の中の一番美しい葉っぱを10枚ほどプレゼントした。

あの少女はどうしているのかな？ もう高校生ぐらいでしょうに・・・・・・・・



「妖精の宿」

ある年の大晦日、杉山神社のあたりを歩き回っていると、不思議な光景に出会った。普段光が届かぬ木立の中に西日が差していたためであろう。小高い丘の中の古ぼけたおやしろが、生き生きと自己主張しているのではないか。

そして小人の妖精たちが中から次々と手をつないで現れ、踊っている情景！ 私は夢中でシャッターを切り続けた。随分と長かったように思ったが、時計を見ると僅か数分のこと。いつの間にかその群舞は消えていた。



「暮れ行くつくし野」

つくしの裏には何もないと思っていたら、ある日、丁度日没時にこの風景を見つけた。
不断気付かぬフォルムが天を刺し、迫力ある演出をしてくれていた。



「桜の^{しとね}褥」

時期になると私は毎年杉山神社の境内に行き。ゆっくりと桜の花びらの贅沢な饗宴にあずかることにしていた。お花見の人もここまではあまり来ない。花が咲き誇った直後の贅沢さを、独り占めに出来るので、お気に入りの場所だった。ある年は、この写真右奥の方で、外人さんの子供二人が花びらに埋まり、シートの上で「おままごと」をしている情景にも出会ったことがある。生憎カメラを持っていなかったのので、網膜に焼き付けておいた。思い出すたびに心が和む。

